

平成29年8月23日(水)

老球の細道351号

## バスケットボールで英語力を

会津バスケットボール協会 室井 富仁

グローバルな時代に対応するため、2020年度から小学校で英語が教科となる。バスケットボールばかりでなく小学校の教育にもグローバル化の嵐がやってくる。本格的な導入に伴い、小学校の現場では先生たちが英語の研修に四苦八苦しているようだ。また、小学校の教員採用においては「採用試験で英語の筆記試験を行う」ことや「英検などの英語資格を持つ人を優遇する」「中高で英語を教える資格を持つ人を優先する」などを設ける自治体が目立っていることなどが新聞で報じられていた。

この流れを受けてか、NHKの子ども番組などでも英語を取り入れた番組が増えている。流行に遅れまいと、わが孫に対してアンパンマンから英語番組へとシフト替えさせている。特にNHK「えいごであそぼ」番組などは、元体操オリンピック選手が英語で掛け声をかけながら子どもたちに英語のイメージを身体で表現させている。孫と一緒に見ているが、元体操選手が私の好みであるという不純な動機は2歳の孫は気づいていない。

また、コーチの専門誌『コーチングクリニック』(ベースボールマガジン社)においても「運動遊び×英語」の特集記事が毎回掲載されている。「だるまさんが転んだ」「鬼ごっこ」などの伝統的な遊びを英語のキーワードを使いながら、身体運動と英会話学習を両立させながら効率よくすすめるプログラムが連載されていて興味深く読んでいます。

私のバスケットボールクリニックでもコーチングポイントは英語のキーワードで説明する。しかし、クリニックが終わるとコーチや保護者の方々から子どもたちは英語の意味がわからなかったと苦言が出る。バスケットボールのスキル、プレイ、そしてルールはほとんど英語表記でなされているのに。バスケットボールそのものも「籠球」という時代は終わった。今も残るのは「老球」で、残念ながら世界広しと言えども私しか使っていない。

今まで英語を自由に使えなかったために多くの失敗と不自由さを感じさせられた。初めてフィリピンのマニラで世界選手権を観戦に行ったとき、同行した英語のできる人達は一人で自由に行動していたが、英語の使えない私は常に英語のできる人と一緒にないと不安だった。英語が使える、使えないでは海外における行動エリアがまるで違う。

英語がうまく使えないためにパニックになった経験がある。1999年会津高校バスケットボール部を引率してアメリカ遠征に向かった時である。添乗員なしで私が現地インディアナ州エバンズビルまで引率した。デトロイト空港で乗り換えをしたが、その時の入国審査で私の英語が不審がられ別室に連れて行かれた。一生懸命弁明したが通じず、あわやデトロイトから私だけ強制送還かと思われたが、危機一髪のところまで日本語のわかる係官が来て難を逃れることができた。この時ほど英語の話せない自分を呪ったことはなかった。

トステイン・ロイブル氏と親交を深めることになってからは、ラジオで英会話教室を聴いたり、積極的に英会話を試みているがいまだに片言。苦手意識は抜け切れない。

バスケットボールは、今後外国人に対する対応、外国からの情報収集、外国でのイベント参加など益々グローバル化の流れが大きくなるだろう。コーチ、プレイヤー、レフリーは、色々な機会を利用して英語力を高めたいものである。私の知人には体育の教員にもかかわらず英語ペラペラのコーチがたくさんいる。目指せ！ヘラヘラ、ペラペラ、べらべら。